

原始仏教における自然の多様性

池 上 要 靖

(身 延 山 大 学)

は じ め に

「自然」という語が、翻訳経典である漢訳経典の中でどのような意味を持って使用されているかを探るには、その原典となる経典との比較対照が必須であることは周知である。漢語である「自然」は、元来仏教用語として活用されていたわけではなく、道教の用語として用いられていた。その言語としての概念は、必ずしも仏教の原語と合致するものではなかった。しかし、それにもかかわらず、六朝期を頂点として、この語が漢訳経典の中で多用されてきた事実は動かし難い。これは、「自然」が有する「ある事象はそれ自体として他に依存しない」、または「ある事象はそれ自体が変化する」という概念が、仏教の「ある事象に関する特性 (svabhāva)」を説明する上で、他の適切な語を持ちえなかった当時の漢語の語彙から流用し易かったためだろう。

Pāli 経典において、漢訳語「自然」の原語として指摘されている語は、dhammatā, pakati, sabhāva などであるが、dhammatā は esā buddhānaṃ dhammatā (これは諸仏の常法である) という定型句に見られるように仏と法の特性を示し、pakati, sabhāva は事象の本質を示す語として認識されている。

この点に留意し、漢訳語の「自然」という概念が Pāli Nikāya 中のどのような語とどの程度結びついて、どのような文脈を構成しているのかについて検討し、その意味付けを考察する。

阿含経と Nikāya における「自然」の事例

阿含中に見ることができる自然の用例には、次のような文法的特徴を見出すことができる。自然の語は実に多彩に活用されている。①には名詞としての用法、②には副詞としての用法、③には形容詞としての用法である。以下にその例を見ながら、Nikāya 中の該当箇所との比較検討を試みる。

①名詞としての用法

(7) 謂佛所説。十二部經。一文。二歌。三記。四頌。五譬喻。六本記。七事解。八生傳。九廣博。十**自然**。十一道行。十二兩現。是名爲法。⁽¹⁾

訳 いわゆる仏の説かれた十二部経は、一に文、二に歌、三に記、四に頌、五に譬喻、六に本記、七に事解、八に生伝、九に広博、十に自然、十一に道行、十二に両現、これは名づけて法を為す。

(1) 爾時世尊告曰。阿難。持戒者不應思令我不悔。阿難。但法**自然**持戒者便得不悔。阿難。有不悔者不應思令我歡悅。阿難。但法**自然**有不悔者便得歡悅。阿難。有歡悅者不應思令我喜。阿難。但法**自然**有歡悅者便得喜。阿難。有喜者不應思令我止。阿難。但法**自然**有喜者便得止身。阿難。有止者不應思令我樂。阿難。但法**自然**有止者便得覺樂。阿難。有樂者不應思令我定。阿難。但法**自然**有樂者便得定心。阿難。有定者不應思令我見如實知如眞。阿難。但法**自然**有定者便得見如實知如眞。阿難。有見如實知如眞者不應思令我厭。阿難。但法**自然**有見如實知如眞者便得厭。阿難。有厭

者不應思令我無欲。阿難。但法自然有厭者便得無欲。阿難。有無欲者不應思令我解脫。阿難。但法自然有無欲者便得解脫一切姪怒癡。…中略…阿難是爲法法相益法法相因。⁽²⁾

訳 世尊は申された。「阿難よ、戒を持つ者は、「私は後悔したくない」という思いを抱いてはいけない。阿難よ、ただし法自然であるから、戒を持つ者はすなわち（自然に）後悔しないことを得る。阿難よ、後悔のない者は、「私は歓悦を得たい」という思いを抱いてはいけない。阿難よ、ただし法自然であるから、後悔のない者はすなわち（自然に）歓悦を得る。阿難よ、歓悦ある者は、「私は喜びを得たい」という思いを抱いてはいけない。阿難よ、ただ法自然であるから、歓悦ある者はすなわち（自然に）喜びを得る。阿難よ、喜びを得た者は、「私は（身に）止息を得たい」という思いを抱いてはいけない。阿難よ、ただ法自然であるから、喜びを得た者はすなわち（自然に）身に止息を得る。阿難よ、身に止息を得た者は、私は楽を得たい」という思いを抱いてはいけない。阿難よ、ただ法自然であるから、身に止息を得た者はすなわち（自然に）楽に目覚めることを得る。阿難よ、楽を得た者は、「私は入定を得たい」という思いを抱いてはいけない。阿難よ、ただ法自然であるから、楽を得た者はすなわち（自然に）入定の心を得る。阿難よ、入定を得た者は、「私はあるがままの真実を見たい」という思いを抱いてはいけない。阿難よ、ただ法自然であるから、入定を得た者はすなわち（自然に）あるがままの真実を見る。阿難よ、あるがままの真実を見ることを得た者は、「私は厭離を得たい」という思いを抱いてはいけない。阿難よ、ただ法自然であるから、あるがままの真実を見ることを得た者はすなわち（自然に）厭離を得る。阿難よ、厭離を得た者は、「私は無欲を得たい」という思いを抱いてはいけない。阿難よ、ただ法自然であるから、厭離を得た者はすなわち（自然に）無欲を得る。

阿難よ、無欲を得た者は、「私は解脱を得たい」という思いを抱いてはいけない。阿難よ、ただ法自然であるから、無欲を得た者はすなわち一切の姪欲、怒欲、癡欲から解脱することを得る。……阿難よ、これが法は法相の益となり、法が法相の因を為す。

(イ) Silavato bhikkhave silasampannassa nacetanāya karaṇīyaṃ ‘avippaṭṭisāro me uppajjatu’ ti. **Dhammatā** esā bhikkhave, yaṃ silavato silasampannassa avippaṭṭisāro uppajjati. Avippaṭṭisāriṣṣa bhikkhave na cetanāya karaṇīyaṃ ‘pāmujaṃ me uppajjatu’ ti. **Dhammatā** esā bhikkhave, yaṃ avippaṭṭisāriṣṣa pāmujaṃ uppajjati. Pamuditassa bhikkhave na cetanāya karaṇīyaṃ ‘pīti me uppajjatu’ ti. **Dhammatā** esā bhikkhave, yaṃ pamuditassa pīti uppajjati. Pītimanassa bhikkhave na cetanāya karaṇīyaṃ ‘kāyo me passambhatu’ ti. **Dhammatā** esā bhikkhave, yaṃ pītimanassa kāyo passambhati. Passaddhakāyo bhikkhave na cetanāya karaṇīyaṃ ‘sukhaṃ vediyāmi’ ti. **Dhammatā** esā bhikkhave, yaṃ passaddhakāyo sukhaṃ vediyati. Sukhino bhikkhave na cetanāya karaṇīyaṃ ‘cittaṃ me samādhīyatū’ ti. **Dhammatā** esā bhikkhave, yaṃ sukhino cittaṃ samādhīyati. Samāhitassa bhikkhave na cetanāya karaṇīyaṃ ‘yathābhūtaṃ jānāmi passāmi’ ti. **Dhammatā** esā bhikkhave, yaṃ samāhito yathābhūtaṃ jānāti passati. Yathābhūtaṃ bhikkhave jānato passato na cetanāya karaṇīyaṃ ‘nibbindāmi virajjāmi’ ti. **Dhammatā** esā bhikkhave, yaṃ yathābhūtaṃ jānaṃ passaṃ nibbindati virajjati. Nibbindassa bhikkhave virattassa na cetanāya karaṇīyaṃ ‘vimuttiñāṇadassanaṃ sacchikaromi’ ti. **Dhammatā** esā bhikkhave, yaṃ nibbindo viratto vimuttiñāṇadassanaṃ sacchikaroti. ... pe... Iti kho bhikkhave dhammā ‘va dhamme abhisandenti, dhammā ‘va

dhamme paripūrenti apārā pāraṃ gamanāyā⁽³⁾ ti.

訳 比丘たちよ、戒を持ち具足せる者にとって「後悔が私に起きないように」という思いが為されるべきではない。比丘たちよ、これは常法であるから、戒を持ち具足せる者に後悔は生じない。比丘たちよ、後悔が生じない者にとって「悦びが私に生じるように」という思いが為されるべきではない。比丘たちよ、これは常法であるから、後悔が生じない者に悦びは生じる。悦べる者にとって「喜びが私に生じるように」という思いが為されるべきではない。比丘たちよ、これは常法であるから、悦べる者に喜びが生じる。比丘たちよ、喜びの心（を得た）者にとって「私にとって身体が軽安であるように」という思いが為されるべきではない。比丘たちよ、これは常法であるから、喜びの心（を得た）者の身体は軽安である。比丘たちよ、軽安なる身体（を得た者）は、「（私が）楽を感受するように」という思いが為されるべきではない。比丘たちよ、これは常法であるから、軽安なる身体（を得た者）は楽を感受する。比丘たちよ、楽（を得た者）は「私にとって心が入定するように」という思いが為されるべきではない。比丘たちよ、これは常法であるから、楽（を得た者）は入定する。比丘たちよ、入定（を得た者）にとって「（私は）如実に知見するように」という思いが為されるべきではない。比丘たちよ、これは常法であるから、入定した者は如実に知見する。比丘たちよ、如実に知見（を得た者）にとって「（私は汚染から）厭離するように」という思いが為されるべきではない。比丘たちよ、これは常法であるから、如実に知見（を得た者）は（汚染から）厭離する。比丘たちよ、（汚染から）厭離（した者）にとって、「（私は）解脱知見をさとるように」という思いが為されるべきではない。比丘たちよ、これは常法であるから、（汚染から）厭離（した者）は解脱知見する。…（中略）…比丘たちよ、実に諸法こそが諸法を等流し、諸法

こそが諸法を成満し、此岸より彼岸に行くことを（完成する）。

①では自然の名詞的用法において2種の形態を例示した。(7)では、十二部経の第十の nidāna が「自然」と訳されているケースと、(1)は出家比丘が戒律を持つことから修行が進み、解脱知見を得る段階を説明する中で、比丘が特別に「〇〇でありたい」という願いを抱かなくとも、修行が進んでゆけば「自然」にその果として次の状態を得てゆくことが説かれている内容である。

(7)は十二部経の nidāna を「自然」と訳している箇所であるが、このような訳例には他に呉の支謙訳の「七知経」⁽⁴⁾がある。(7)の「般泥洹経」は訳者不明であるが、白法祖訳とされる「佛般泥洹経」とともに「遊行経」よりも漢訳年代は古いとされている。⁽⁵⁾そして、「七知経」も訳出は呉の時代であるから、文体も用語も六朝期よりも古い。すると「自然」と訳された nidāna との意味上の相関はどうであろうか。nidāna は ni + √dā から結ぶ、結びつけるという原意を持ち、そこから因縁、原因、関係などの意味がある。nidāna は表出したある事柄の元を説明することをその本意としていると言えるだろう。したがって、中国語としての「自然」が人為の外にある関係性を説く意味において、nidāna との共通項が見出される。

(1)は、Pāli 文の dhammatā が、「法自然」と漢訳されている例である。阿含經典のなかで「法自然」という訳語が使われているのはこの箇所のみであり、律などでも訳例を見ない。ただ、大乘系經典類などでは多用されている語であることを考えれば、「法自然」の語の重要性が指摘されよう。⁽⁶⁾「法自然」とは「法として自ら然るなり」ということを意味している。いわゆる何ものにも左右されずに、ただそれとしてあるものを意味するのが漢訳語としての「法自然」であろう。Nikāya 中の dhammatā を、「常

法」と訳したのは、esā buddhānaṃ dhammatā を「諸佛常法」と訳す定型句の存在による⁽⁷⁾。では、この常法とはどのような意味を持つものであるか。他の Nikāya では次のように述べる。

(ウ) **Dhammatā** esā bhikkhave, yadā Bodhisatto mātu kucchiṃ okkanto hoti, cattāro naṃ deva-puttā catuḍḍisaṃ rakkhāya upagacchanti : “Mā taṃ Bodhisattaṃ vā Bodhisatta-mātaraṃ vā manusso vā amanusso vā koci vā viheṭhesīti.” Ayam ettha **dhammatā** ...⁽⁸⁾

訳 比丘たちよ、これは常法である。ボサツが母の胎に入ったある時、四人の神の子達が彼（ボサツ）を守護しようと、四方から近づいて来た。「かのボサツ、あるいはボサツの母を、人や非人の誰にも傷つけさせない。」これがここでの常法である。

(ウ) 諸比丘。當知**諸佛常法**。毘婆尸菩薩在母胎時。專念不亂。有四天子。執戈矛侍護其人。人與非人不得侵嬖。此是**常法**。⁽⁹⁾

訳 諸比丘よ、まさに諸仏の常法を知るべし。毘婆尸菩薩が母胎に在りしとき、心が統一されて乱れていなかった。（その時）四人の天子が、楯や矛を取ってその人を護るために待機していた。人や人で無い者は侵すことができなかった。これは（諸仏の）常法である。

Dhammatā は①の(イ)における「法自然」と(ウ)の「常法」という訳語によって表されている。内容は、(イ)では、比丘は修行階梯において自ら修行の目標を欲してはいけない、修行のある段階の完成が次の段階へと誘い最終の解脱を得るという連綿とした流れを「法自然」という言葉で表している。(ウ)は、常法の意味をよく考えねばならない。文意からすればヴィパシボサツが母の胎内に宿ったため、彼の誕生を妨げようとする人や非人の類から、彼やその母を守ろうとする四人の神の子のあり方が説かれている。このあり方こそが常法であると理解される。Nikāya では esā dhammatā

という定型句が示される。漢訳では「諸佛常法」となっており、原文には buddhānaṃ の語は無いものの、その意味するところは変わらない。ここで esā dhammatā を漢訳は「常法」とし、英訳では the rule と訳されている（注8参照）。ヴィパシボサツを守ろうとする四人の意向は ‘Mā ... (中略)... viheṭhesi’ と optative に mā の否定語が加わり、禁止の語意が強くなる。esā dhammatā はある状態がくずれることの無いように保つこと、または保たれることを意味しており、漢訳語の常法は「常」を用いることでこの意味を示し、英訳は rule にその意味が端的に表れていると見られよう。(イ)と(ウ)は「法自然」と「常法」といずれも訳語が異なるものの、dhammatā のそれぞれの意味をよく示している。むしろ dhammatā が持つ語意のゆれ（多様性）が若干の意味のズレを起こしているようである。「法自然」とする場合、語意に緩やかな移行、緩やかな変化が一定の条件のもとにおきる様子をなし、「常法」といった場合は、一定の条件下で起きている事柄が逸脱しない状態を示していると言えよう。

②副詞としての用法

我於此處是梵。大梵。我自然有。無能造我者。我盡知諸義典。千世界於中自在。最爲尊貴。能爲變化。微妙第一。爲衆生父。⁽¹⁰⁾

訳 私はこの処において、ブラフマンにして、大ブラフマンであり、私は自然に存在し、私を創造する者はいない。私は諸々の義典を知り尽くし、千世界の中において自在にして、最も貴く尊い。よく変化し、微妙なること第一であり、衆生の父である。

‘Aham asmi Brahmā Mahā-brahmā abhibhū anabhibhūto aññad-atthu-daso vasavattī issaro kattā nimmātā seṭṭho sañjitā vasī pitā bhūta-bhavyānaṃ.’⁽¹¹⁾

訳 私はブラフマン、偉大なるブラフマンであり、征服せる（者）であり、（私を）征服せる（者）なく、普く見る者であり、全能者、自在者、創造者、化作者、最上者であり、主宰者にして、自在を得た過去と未来の父である。

②は「自然」の副詞的用法である。阿含經典において「自然」の語は実に535回の例を数えるが、その中で漢語の副詞＋動詞の修飾連語の使用例が267回と最も多いのである。⁽¹²⁾この修飾連語の形式で「自然」の意味を考えると、副詞としての働きであるから、動詞を修飾し、この例では「自然」に「存在する」という意味から、人為的、作為的な要素を排除した「あるがままに」が強調される。しかし、Nikāya ではそのようなニュアンスを感じさせる語は無い。ただ、abhibhū anabhibhūta から読み取れる abhibhū（征服せる者）でありながら anabhibhūta（征服されざる者）であるということに、何者にも左右されない存在の表明があると見られることから、漢訳語ではない中国語の「自然」が文意を際立たせるために挿入された、と言えるだろう。このような例によって示されるように、副詞＋動詞の修飾連語の場合、副詞としての「自然」は漢文中への挿入であり、Pali 原文にその該当する語を見出せない。挿入された「自然」は明らかに中国語としての「自然」を意味しており、「あるがままに存在すること」を意図して、異なる文化の神であるブラフマンという存在の特異性を、中国人に理解し易い表現を用いたのであろう。

③形容詞としての用法

(7) 我今觀衆生之類心中所念。此人必當身壞命終。生善處天上。然後時觀此人身壞命終。生善處天上。於彼受自然之福。快樂無比。⁽¹³⁾

訳 私は今、衆生の生けるもの心中の思いを観察する。この人は必

ず身体が壊れて命が終わって天上の善き処に生まれる。然る後に、この人の身体が壊れて命が終わって、天上の善き処に生まれ、(その処で)彼は比類のない心地よき自然の福を受けることを観る。

(7) ‘Idha ahaṃ Sāriputta ekaccaṃ puggalaṃ evaṃ cetaṣā ceto paricca pajānāmi: Tathā ‘yaṃ puggalo [paṭipanno tathā ca iriyati tañ-ca maggaṃ samārūḥho yathā kāyassa bheda] param - maraṇā sugatiṃ saggaṃ lokaṃ upapajjissatīti ; tam -enaṃ passāmi [aparena samayena dibbena cakkhunā visuddhena atikkantamānusakena kāyassa bheda param - maraṇā] sugatiṃ saggaṃ lokaṃ upapannaṃ ekantasukhā vedanā vediyamānaṃ.’⁽¹⁴⁾

訳 サーリプッタよ、私はある一類の人間を、このように(自分の)心により(その人の)心を熟知する。「この人はこのように道を実践し、行き、道に入る。そのゆえに(この人は)身体が壊れて死後に善処、天界に再生するだろう」と。清浄で人を超えた神のような天眼によって、(この人が)身体が壊れて死後に善処、天界に再生し、専らに福の感受があることを私は見る。

(1) 其後此地生**自然粳米**。無有糠粃。色味具足。香潔可食。是時衆生復取食之。⁽¹⁵⁾

訳 その後に、この地は自然の粳米を生じた。糠などは無く、色も味もよく、香りはさわやかで食べることができる。このときの衆生はまたこれを取って食した。

(1) ‘Atha kho tesaṃ Vāseṭṭha sattānaṃ badālatāya antara-hitāya akaṭṭha-pāko sāli pātur ahosi, akaṇo athuso sugandho taṇḍulapphalo.⁽¹⁶⁾ Yan taṃ sāyaṃ sāyam-āsāya āharanti, pāto taṃ hoti pakkaṃ paṭivirūḥaṃ. Yan taṃ pāto pātar-āsāya āharanti sāyaṃ taṃ hoti

pakkam paṭivirūḷham, nāpadānam paññāyati. Atha kho te Vāseṭṭha
sattā akatṭha-pākam sālīṃ paribhuñjantā tam-bhakkhā tadāhārā
ciraṃ digham addhānam aṭṭhamsu.⁽¹⁷⁾

訳 さて、ヴァーセッタよ、これらの衆生に対して、蔓草が消え去
ってから耕さずに熟す米が現れ、籾皮なく穀皮なく香りよく米粒は美しか
った。これを夕方夕食に取り出すと、早朝に、これは再び成長して熟し、
朝にこれを朝食として取り出すと、これは夕方には再び成長して熟し、
(成長の) 跡を知られることもなかった。さて、ヴァーセッタよ、これら
の衆生は、耕さずに熟す米を食べ続け、これを食料とし、これを食べるこ
とを、久しく長い間続けた。

③の漢訳文では「自然」が修飾連語として形容詞＋名詞の働きを示して
いるものである。形容詞＋名詞の構造を持つこの形式は②と同じ修飾連語
ではあっても、名詞を修飾する形容詞の用法は、②の「自然」の副詞的
用法とは異なる使用例である。

(7)の漢訳の要旨は、ある人が天上に生まれかわって快樂で比べようのない
「自然之福」を受けることを観察するのであるが、ここで示される「自
然之福」は Nikāya 中の ekanta-sukhā に充当する。ekanta は「一向の、
専ら、専一の」という形容詞であり、楽、幸福という意味の sukhā を修
飾する点では、形容詞＋名詞の形を取り、一見すると「自然之福」と整合
するが、ekanta-sukhā の複合語は形容詞の意味を有し、ekanta は文法上
副詞的に扱われ、形容詞 sukhā を修飾する。⁽¹⁸⁾すると ekanta は「専らに、
専一に、一向に」という意味になり、sukhā は「楽しい、幸福の」という
意味を示し、ekanta-sukhā は「専らに幸福の」という形容詞句をつくり、
続く vedanā の「感受」を修飾して「専らに幸福の感受」、つまり文意は
「天上に生まれかわった者はただ幸福だけを感受する」という理解ができ

る。すると「於彼受自然之福。快樂無比。」の文意の中に、Nikāya から示された意図を、特に「自然之福」から読み取ることは難しい。文法上から ekanta=自然は対応するが、その語意は必ずしも適合しているとは言えないだろう。

(イ)は(フ)と同じく漢語の修飾連語である形容詞+名詞であるが、「自然粳米」という表現は阿含中に多く、「自然～」の連語ではもっとも頻出している。⁽¹⁹⁾このケースの特徴は、「自然」の形容詞が修飾している「粳米」の語が物質名詞である点に注目される。粳米、いわゆる、白硬米（うるち米）を「自然」が形容している意味はどのようなものであろうか。文意からは、このうるち米の特徴を次のようにまとめる。(1)手を加えずとも食べることができる、(2)外皮や糠がついていない、(3)香りがよく色ツヤがある、という点である。このような特徴を有するうるち米を総称する形容詞が「自然」である。では、Nikāya はどうであろうか。 akatṭha-pāko sāli pātur ahosi, akaṇo athuso sugandho taṇḍula-pphalo（耕さずに熟す米が現れた。粃皮なく穀皮なく香りよく米粒は美しかった。）という文の中、akatṭha-pāko の akatṭha は a+kṭṭha(Skt. kṛṣṭa)であるから「働かざる」の原意を持ち、pāka は「炊事」の意味であるので、sāli という米の種類を示す語を修飾し、「働かなくとも炊事された白硬米」と直訳される。「働かざる」とはこの場合、白硬米に対して「働かざる」であるので、田畑などを耕作しないという意味になる。また、「炊事」を示す pāka は √pac であるから「料理する、熟する、煮る」という意味を本来含有しているので、ここでは「食べられる状態になっていること」を示している。このような解釈から sāli という米は「耕さなくとも食べられる状態の白硬米」を意味する。sāli は単なる白硬米ではなく、耕すことなく食することが可能で、色も味も良いことが示され、さらに Nikāya は、その米が自

ら1日の間に成長して同じように幾度も食することができる、と述べている。「自然粳米」とは、Nikāya からの文意を加味すれば、「自ら成長して耕すこともなく、脱穀することもなく、色も香も良く、そのままで食べることができる白粳米＝自然粳米」と理解される。Nikāya 中には漢訳の「自然」に該当する語を見出せないが、文意からすれば「自然」とは「自ずからの状態」を意味する代用語として挿入されていることがわかる。

Nikāya＝漢訳語の用例

ここでは Nikāya の原語と漢訳語とが一致している例をあげ、考察を試みる。

④ ‘Katamañ-ca bhikkhave dhammasamādānaṃ paccupanna-sukkhañ-ca eva āyatiñ-ca sukhavipākaṃ : Idha bhikkhave ekacco **pakatiyā** na tibbarāgajātiko hoti, so na abhikkhaṇaṃ rāgaṃ dukkhaṃ domanassaṃ paṭisaṃvedeti; **pakatiyā** na tibbadosajātiko hoti, so na abhikkhaṇaṃ dosaṃ dukkhaṃ domanassaṃ paṭisaṃvedeti; **pa-katiyā** na tibbamohajātiko hoti, so na abhikkhaṇaṃ mohajaṃ dukkhaṃ domanassaṃ paṭisaṃvedeti ...’⁽²⁰⁾

訳 比丘たちよ、何が現在の楽と未来の楽の果報を得る法であるか？ 比丘たちよ、ある者は自然にはげしい貪欲を生じることはない。彼は常に貪欲の苦や憂いを感じ受することもない。自然にはげしい瞋りを生じることはない。彼は常に瞋りの苦や憂いを感じ受することもない。自然にはげしい愚痴を生じることはない。彼は常に愚痴の苦や憂いを感じ受することもない。

④ 云何受法現樂當來亦受樂報。或有一**自然**不重濁欲。不重濁恚。

不重濁癡。彼不數隨欲心。受苦憂感。不數隨恚心。癡心。⁽²¹⁾

訳 現在の楽やまさに（未来に）到来する楽の報を受ける法とは何であるか？ ある一人の人がいて、自然に重く濁れる欲なく、重く濁れる怒りなく、重く濁れる愚痴なし。彼は欲の心にとびとび従い苦を感じて憂うことなく、怒りの心や愚痴の心にとびとび従うこともない。

この Nikāya 中で pakatiyā は女性名詞の具格を取っているが、文法上は具格からつくられる副詞句と理解される。⁽²²⁾ ゆえにここでは英訳中に by nature（注20参照）とあり、漢訳中にも「自然」は副詞としての修飾連語の働きを示している。漢訳文の特徴である省略の形式があるものの、文法上の用例では Nikāya と漢訳が「自然」に関しては一致している例である。文意はどうであろうか。Nikāya ではブッダが現在の苦楽と未来の果報としての苦楽について述べた部分である。ここでは現在楽と未来の果報としての楽を得る者のあり方について説いている。この内容については当たり前であるが、漢訳も同様である。Nikāya, 漢訳ともに現在に楽の果報を受け、未来においても楽の果報を受ける者はどのような状態にある者かを問いかけている。この自問に対してブッダは貪・瞋・癡の三毒を生ずることのない人はそれらを受けることもなくなるのであるから、そのような状態の人は結果として現在も未来も sukha, 楽の果報を受けているのである、と答える。この三毒から離れた状態（楽の果報を受けていること）にある人の行為は、その状態の継続を意図せずに壊そうとする働きが為されないこと（pakati, 自然）を意味している。

ここでは pakati, 「自然」の両語は、副詞の働きを示す点では②に同じ文法的特徴を示すが、文意からすればこのコンテキストがブッダの言質である点も考慮して、むしろ①の(イ)と(ウ)の用例である、「緩やかな変化が一

定の条件のもとにおきる様子」「ある状態を保とうとする働き (esā dhammatā)」に近似していると考えられる。①の(イ)は出家者に起こる心の有り様が、修行の階梯と密接に関係し、次の修行の果報を引き継ぐことが説かれ(法自然)、(ウ)ではヴィパシボサツの出生に関する記述で、このボサツの誕生を守ろうとする働きが起こることは有るべき状態として esa dhammatā (常法) が説かれた。この④は因果関係を説明する点では①の(イ)によく類似した表現といえるだろう。しかし、特に④では果報が強調され、ある状態を作り出す原因としての行為が説明されている点では、①の(ウ)にも近い。それは④において abhikkhaṇa の語が副詞として表れている点である。pakatiyā と abhikkhaṇa はそれぞれ扱われる文節は異なるが、コンテキストは結びつく。pakatiyā は自然、abhikkhaṇa は常としての意味と、両語ともに副詞として動詞を補足して文意を同じ形態にしている。つまり、ここでは pakatiyā と abhikkhaṇa は同義異語と見ることができ、「ある状態をもたらす変化は一定の条件下で成立する」ことを意味している。このような点から、④は①の(イ)と(ウ)の中間的意味を示していると考えられる。

ま と め

これまで見てきたように「自然」と漢訳される語について、Nikāya と漢訳文の比較検討を試みてきた。その結果、漢訳語の「自然」には文法的に3種の用法が確認された。それは名詞・副詞・形容詞のそれぞれの活用である。それらの活用によって比定される Pali 語は必ずしも一つではなく、また、該当する Pali 語が見出せない場合もあった。それは中国語の「自然」の概念が補足語として挿入されたものと確かめられた。たとえば、

それは次のような例によっても知られよう。「當知諸佛**常法**。毘婆尸菩薩。從兜率天降神母胎。從右脇正念不亂。當於爾時地爲震動。放大光明普照世界。日月所不及處皆蒙大明。幽冥衆生各相覩見知其所趣。時此光明復照魔宮。諸天釋梵沙門婆羅門。及餘衆生普蒙大明。諸天光明**自然不現**。」⁽²³⁾

この大本經の一節に示されている文頭の「常法」は dhammatā esā bhikkhave であるが、文末の「諸天光明自然不現」は Appamāṇo ca uḷāro obhāso loke pātubhavati atikkamm' eva devānaṃ devānubhāvaṃ. Ayam ettha **dhammatā**.⁽²⁴⁾（そして無量の大きいなる光明は神々の威力に勝って世界に現れる。これがここでの常法である。）であり、文末に関して、漢訳語の「自然」は諸天の光明の出現にのみ修飾の働きを示しているが、Nikāya の中では dhammatā はむしろ光明全体の働きを指している。この場合、「自然」は文脈から挿入された副詞と見ることができ、文末の Ayam ettha dhammatā の一文は省略されたと見ることができよう。

また、Nikāya では③の(ア)に見られる ekantasukha の用例のように、漢訳の「自然」との語意の差異が明確に現れるものや、逆に Nikāya のコンテキストで中国人として理解し難い sāli 米については、よく「自然」の語が意味を補っている箇所も見られた。特にこの場合、インドの風土では耕作せずとも作物が実ることは決して無理なことではなく、現在でも認識されやすい事柄であることに対して、中国における稲作では認識し難い事象であったろう。さらに、④の pakatiyā と abhikkhaṇa の例では、文意から①の(イ)の dhammatā の用例に近似しているものも確認された。

これらの用例は、全体の一部にしか過ぎず、一つ一つの例をここで検証するには無理があるが、少ないこれらの用例から漢訳語の「自然」に含まれる Nikāya のコンテキストが実に幅広いことが確認され、この語が持つ意味の多様性が Nikāya から直接に結びつくケースは少なく、中国語とし

ての解釈を容易にするための使用が多いことに留意される。

注

- (1) 大正 1 : p.188a. 「般泥洹經」 cf.74b, 810a, 大正 2 : 657a, 794c, 813a. いずれも十二部經に関する記述である。(ア)は Nikāya に該当經典がない。但し、通常十二部經は、1 sutta, 2 geyya, 3 veyyakaraṇa, 4 gāthā, 5 udāna, 6 itivuttaka, 7 jātaḥ, 8 vedalla, 9 abbhutadhamma, 10 nidāna, 11 avadāna, 12 upadeśa である。順序は必ずしも対応してはいない。
- (2) 大正 1 : p.485b.
- (3) AN.V, pp.2-4. *Āṇisaṃsa-Vagga*. GS.V, pp.3-4 : ‘ Monks, for one who is virtuous, in full possession of virtue, there is no need for the purposeful thought : May freedom from remorse arise in me. **This**, monks, **is in accordance with nature** — that for one who is virtuous, in full possession of virtue, freedom from remorse arise. Monks, for one who is free from remorse there is no need for the purposeful thought: May joy arise in me. **This**, Monks, **is in accordance with nature** — that for one who is free from remorse joy arises. Monks, for one who is joyous there is no need for the purposeful thought: May rapture arise in me. **This**, monks, **is in accordance with nature** — that for one who is joyous rapture arises. Monks, for one whose body is calmed there is no need for the purposeful thought: May my body be calmed. **This**, monks, **is in accordance with nature** — that for one whose heart is enraptured the one body is calmed. Monks, for one whose body is calmed there is no need for the thought: I feel happiness. **This**, monks, **is in accordance with nature** — that one whose body is calmed feels happiness. Monks, for one who is happy there is no need for the thought: My mind is concentrated. It follows that the happy man’s mind is concentrated. Monks, for one who is concentrated there is no need for the thought: I know and see things as they really are. It follows **naturally** that one concentrated does so. Monks for one who knows and sees things as they really are there is no need for the thought: I feel revulsion; interest fades in me. It follows **naturally** that such an one feels revulsion and fading interest. Monks, for one who feels revulsion and fading interest there is no need for the thought: I realize release by

knowing and seeing. It follows **naturally** that he who feels revulsion and fading interest realizes release by knowing and seeing.Thus, monks, one state just causes another state to swell, one state just causes the fulfillment of another state, for the sake of going from the not-beyond to the beyond.

英訳文では、nature という名詞形で訳される前半部と naturally という副詞形で訳される後半部があるが、Nikāya 文中では dhammatā esā の定型句であることから、‘This is in accordance with nature that’ の前半部の表現が首肯される。

- (4) 大正 1 : p.810a. cf. 421a, 「中阿含七法品善法經」第一, 大正 2 : p.728c. 「增壹阿含經等法品」第三九。この 2 經は七知經の異訳であり、いずれも十二部經をあげているが、「自然」と訳す例はない。訳者は、東晋の僧伽提婆であるから七知經の訳者である支謙よりも後の訳例であるが、時代は六朝期であり、鳩摩羅什よりも早い。
- (5) 中村『遊行經』pp.18-20.
- (6) 例えば、玄奘訳「大般若波羅蜜多經」においては、「一切如來應正等覺。所有佛法如來法自然法一切智智法」が定型句として随所に現れる。大正 6 : p.580a-b, ; 大正 7 : p.608a-b, 818b.
- (7) 「諸佛常法」は、大正 1 : p.3c*, 4a-b*, 19b, 88a, 101a, 136b-c* ; 大正 2 : p.480b, 621c, 以降は「諸佛世尊常法」p.511a, 674b, 726c, 752c, 758b. *印は当該箇所において複数回現れるもの。
- (8) DN. II, pp.12-14. *Mahāpadāna Sutta* 1-17. PTS 本には 17 とあるが、すでに前節において 17 節があるため、本来ならば第 18 節になるべきものであるが、ここでは PTS 本のまま 17 節と表記した。

DB. II, p.9 : 17a. ‘It is **the rule**, brether, that, when the Bodhisat is descending into a mother’s womb, four sons of the gods go toward the four quarters to protect him, saying:-“Let no one, be he human, or non-human, or to the mother of the Bodhisat !” That, in such a case, is the rule.

- (9) 大正 1 : p.3-4.
- (10) 大正 1 : p.90b.
- (11) DN. I, p.18. *Brahmajāla sutta*, 1-2-5 DB. I, p.31 : “I am Brahmā, the Great Brahmā, the Supreme One, the Mighty, the All-seeing, the Ruler, the Lord of all, the Maker, the Creator, the Chief of all, appointing, to each his place, the Ancient of days, the Father of all that are and are to be.
- (12) 副詞＋動詞の修飾連語が阿含經典中に表れる箇所は、大正 1 : p.1a, 3c, 5b,

24b, 37b, c, 38a, 39c, 47c, 50b, 63b, 90b, 116b, 119a, b, 120c, 121a, 122a, c*, 123a, c, 124c, 125a, 126b, 132b, 134a*, b, 137c, 138c*, 139a*, b*, 140b*, 141a*, 144a, 145a*, 170a, 172a, 175c, 187a, 190a, 205b, 207a, b, 222c*, 267a*, 280b, 281a, 282a, 283a, c, 284b, 285a, c*, 286c, 287a, 290b, 295c, 297a, b, c, 298a, 301a, 302a, 305b, 306a, 307c, 308a, b, 312c, 314c, 315c, 316a, c, 317a, b, 318a, b, 319a, c, 320a*, b, c, 326a, 327b, 329c, 332b, 337c*, 339b, 340a, 346 b, c*, 351c, 356a*, 357b, 358b, 362a, 363a, 367c, 371b, 372b, 373b*, 373c, 374 b, 375a, c, 376a, 381a, 382a, c, 384b, c, 387b, 392c*, 395a, 399b, 401b, c, 404 a*, 406c, 411a*, 413c*, 418a, 440b*, 622c, 674c*, 712a, b, 822a, 824c, 830a, 859b, c, 860b, 868c. 大正 2 : p.45a, 67b*, 163a, b*, 181a, 214a, 255a, 273a, 297c, 303b, c*, 312b, 341b, 361a, 382a, 386b, 394b, 414a, 436a, 446c, 487a, 500 a, 505a, 507c, 602b, 624c, 664b, 675c, 697c, 727b, 731c, 732a, b, c, 733a, 736 b*, 737a*, 743b, 768a, 769b, 773b, 774b, 781a, 784b, 788a*, 807a, 808a, c, 814 c*, 817b, 819a, 829a, 842a, 845a, b, 848b, 850a, b, 851c*, 852a*, c, 853c, 854 a, 865b. (*印は複数)

(13) 大正 2 : p.812a.

(14) MN. I, p.76. *Mahāsthānādasutta* 12. PTS 本文中では [] 内は省略されているが、文意をよく理解するために挿入している。英訳についても同様にした。MLS. I, p.101: Then I, Sāriputta, with my mind comprehend the mind of some person thus: As that person fares along [and as he is going along and has entered that way,] so will he arise, at the breaking up of the body after dying, in a good bourn, a heaven world. After a time I see [by purified deva vision, surpassing that of men that, at the breaking up of the body after dying,] that he has arisen in a good bourn, a heaven world and is experiencing feelings that are exclusively pleasant.

(15) 大正 1 : p.38a. cf. p.675a. 異訳である中阿含第 1 5 4 経「婆羅婆堂経」の該当箇所においても、「自然粳米」とある。但し、Pāli の *Aggañña-sutta* の内容を要約している増一阿含卷第三四の七日品第四十一 (一) 後半部分 (大正 2, p.737a-738a) では「是時地肥自然入地。後轉生粳米極為鮮淨亦無皮表。…」(737a) とある箇所と「自然粳米」(737c) がある。

(16) PTS 版には本文中にあるように -pphalo であるが、文意から PTS 版の footnote にある -pphasso と理解するほうが適当であろう。

(17) DN. III, p.88. *Aggañña-sutta* 16. DB. III, pp. 84-5: Then, Vasetṭha, when the creepers had vanished for those beings, rice appeared ripening in open spaces,

No powder had it and husk.

[Pure,] fragrant and clean grained.

Where of an evening they gathered and carried away for supper, there next morning the rice stood ripe and grown again. Where in the morning they gathered and carried away for breakfast, there in the evening it stood ripe and grown again. No break was to be seen [where the husks had been broken off].

(18) このような例は ekantadukkha の用例に見える。Cf. SN. III, p. 69. *Upāya-vagga* 60(8) *Mahāli*. また、文法的解説は PED. p.160.

(19) 自然粳米の現れる箇所は、大正 1 : p. 38a*, b, 118a, c, 119a, 121a, 133b, 148a, b, c*, 297a, 308a, 314c, 315b, 316b*, 369c, 371b*, 417a, 495a, 622b, 643 c, 644a*, 675a*, b*, c*, 823a, 824c.

大正 2 : p.584a*, 620b*, 621a*, 737c, 789c, 819a, 858b. (* 印は複数)

(20) MN. I, p. 308 *Cūḷadhammasamādānasutta* (45) MLS. I, pp. 370-1 : And what, monks, is the undertaking of dhamma that is both happiness in the present as well as resulting in happiness in the future? Here, monks, someone is not full of attachment (**by nature** and who constantly experiences suffering and grief born of attachment ; he is not) full of hatred **by nature** (and who constantly experiences suffering and grief born of hatred ; he is not) full of confusion **by nature**. He does not constantly experiences suffering and grief born of attachment ...hatred...confusion.

() 内は中略箇所であるが筆者が補足した。

(21) 大正 1 : p.712b.

(22) cf. PED. p.379. 雲井辞典511頁。

(23) 大正 1 : p.3c.

(24) DN.II, p.12. *Mahāpadāna-sutta*. Cf. 注(7), (8)

参考文献

雲井辞典 雲井昭善著『パーリ語佛教辞典』, 山喜房佛書林, 1997年。

大正 1 大正新修大蔵経普及版 阿含部一

大正 2 大正新修大蔵経普及版 阿含部二

大正 6 大正新修大蔵経普及版 般若部二

大正 7 大正新修大蔵経普及版 般若部三

中村『遊行経』 中村 元著『遊行経』上 仏典講座 I 大蔵出版 昭和59年。

AN.V *Anguttara-nikāya*, vol. 5, ed. by E. Hardy, PTS, 1979.

- DB. I *Dialogues of the Buddha*, part.1, by T.W. Rhys Davids, PTS, reprinted in 1977.
- DB.II *Dialogues of the Buddha*, part.2, by T.W. and C.A.F. Rhys Davids, PTS, reprinted in 1989.
- DB.III *Dialogues of the Buddha*, part.3, by T.W. and C.A.F. Rhys Davids, PTS, reprinted in 1991.
- DN. I *Dīgha-nikāya*, vol.1, ed. by T.W. Rhys Davids and J.E. Carpenter, PTS, 1890.
- DN.II *Dīgha-nikāya*, vol.2, ed. by T.W. Rhys Davids and J.E. Carpenter, PTS, 1903.
- DN.III *Dīgha-nikāya*, vol.1, ed. by J.E. Carpenter, PTS, 1911.
- GS.V *Gradual Sayings*, vol. 5, by F.L. Woodward, PTS, 1986.
- MLS. I *Middle Length Sayings*, vol.1, by I.B. Horner, PTS, 1993.
- MN . I *Majjima-nikāya*, vol.1, ed. by V. Treckner, PTS, 1888.
- PED. *Pali-English Dictionary*, ed. by T. W. Rhys Davids and William Stede, reprinted in 1975.

